

大河ドラマ・司馬文学と歴史学

——「日常」の発見——

小川和也

「はじめ」は《獅子の時代》から

大河ドラマの最高傑作は？ 『獅子の時代』に決定!! (独断と偏見による)

一九八〇年放映 内容 慶応三年(一八六七)パリ万博から戊辰戦争(西南戦争)秩父事件をとって、明治二年(一八八九)年大日本国憲法(公布)までを描いた文字通り時代の大河!

脚本・山田太一
キャスト

架空の人物	旗本	菊子	藤真理子	実在の人物
会津藩士	小此木おもん	大原麗子	高松凌雲	尾上菊五郎
平沼銑次	菅原文太	加藤嘉	助右衛門	松子
浦辺桑子	香野百合子	豊屋平蔵	佐野浅夫	板垣退助
永島敏行	永島敏行	おさく	野村昭子	西郷隆盛
				中村富士郎

千代	大竹しのぶ	俣屋の親方	柳家小さん	江藤新平	細川俊之
保子	熊谷美由紀	甚助	大滝秀治	森有礼	中山仁
薩摩藩士		松本英吉	丹波哲郎	伊藤博文	根津甚八
荻谷嘉頭	加藤剛			雲井龍雄	風間杜夫
宗行	千秋実			田代栄助	志村喬
和哥	沢村貞子			瑞穂屋卯三郎	児玉清

主人公は二人

・会津藩士・平沼銑次(菅原文太) 戊辰戦争の敗者の視点
・薩摩藩士・荻谷嘉頭(加藤剛) 薩長政府内の政権批判の視点 憲法
「獅子の時代」は明治維新史を敗者と国家権力への諫言者として挾撃するドラマである。

菅原文太談・平沼銑次はチェ・ゲバラじゃないかとおもって演じていた。

第一回放送「パリ万国博覧会」(シナリオタイトルは「地の果てへ」の冒頭がすごい!)

パリ万博(第二回目開催)って? 慶応三年(一八六七)四月十一

月に開催。日本からは、江戸幕府、薩摩藩、佐賀藩が出展。幕府から將軍・徳川慶喜の弟・昭武一行、薩摩藩から家老・岩下方平らが派遣。薩摩藩は「日本薩摩琉球国太守政府」の旗を掲げ、幕府から独立国のようだと、と猛抗議をつけた。幕府一行が滞欧中に大政奉還、王政復古、戊辰戦争が起き、幕府は滅亡した……。

ナレーション

今から百十三年前、このパリのリヨン駅に、二十数人の日本の武士が降りた。十五代將軍徳川慶喜の弟・昭武に随行する幕府派遣の一行である。その一行を烈しい興奮を抑えて、ひそかに見つめる一人の日本人がいた。ロンドンからやって来ていた薩摩藩派遣の英国留学生（刈谷嘉顕）である。この一握りの日本人に比べ、現在の（パリの）日本人人口は、短期旅行者をふくめると約四万人、日本とパリ間の飛行時間は十六時間である。かれらは船旅五十六日を要した。パリ万国博覧会参加のためである。一行は、その翌年が、明治元年と呼ばれることを、まだ予測だにしていなかった。

「現在の」パリの日常と、「今から百十三年前」＝過去の徳川昭武一行を重ね合わせる。

「タイム・マシンの方法」（後述）

見える目と曇った目の統一。

では、ここで実際に冒頭のシーンを御覧あれ！

NHKドラマ班担当ディスク岡本由紀子「フランス・ロケ日記抄」
（「グラフィック」一九八〇年一月号）

リヨン駅は慶応当時のままである。「汽車も周囲の人びとも、すべて現代そのままで行うわけですから、見る方々にとってやや異様な印象を持たれるかもしれませんが、現代と当時の接点、或いは日本人と外国人との出会い、というものをより強烈に印象づける一つの方法論として、この手法を断行した」

脚本・山田太一の意図

私ははじめ、わが登場人物たちを描くことで、時代の転換期における「並の人間」の経験や日常に近づくことを意図した。……しかし、それは書きはじめる前に、出来ないことが分かった。「大河ドラマ」が、ある時代を描くとき、見る人にその時代の大きな流れが頭に入るようにしなければならぬという前提を思い知ったからである。

たとえば西南戦争を四十五分二回でやるとき、その中に、九州で戦争があることなど一向に知らず、嫁がはばかりで紙を使わずと騒いでいる東京下町の一家の話をいれるわけにはかない。……せめてその視点が、西郷、大久保、山県らを主役にしたものではなく、無名の存在を通したものであることで、水位をやや低くし得るのみである。

無論、その次元で「面白い物語」の緊張を維持して行くことは、それはそれでやり甲斐のある事であり、困難な仕事であったが、書きながら絶えず「枝葉」として切り捨てざるを得ないエピソード、登場人物たちの「なにげない日常」への哀惜あはれがあつたことは事実で

ある。(『獅子の時代』第五巻「あとがき」)

・ポイント

「並の人間」と「日常」への着目。

主役は西郷・大久保・山県ら歴史のスターや元勳ではなく、平沼家や荻谷家の人々、おもんといった架空の、したがって「無名の存在」。

「なにげない日常」への哀惜。

今日の講演のキーワード「日常」が四〇年足らず前、八〇年の大河ドラマで強く意識されていたことを確認した上で、本題に入ります。

1 歴史小説の読者は何者なのか？

そもそもなぜ、私はこんなことを考えているのか？

・ 歴史研究の出発点：修士論文の主題は、戊辰戦争における越後長岡藩の武装中立、それを画策した家老・河井継之助の思想。

・ 修士論文構想の合同発表会において、参考文献に、河井を主人公とした司馬遼太郎『峠』。

・ 河井継之助といえど『峠』！

・ ある教員から叱責。「歴史研究に小説はよろしくない、ケシカラン」
・ ?????? (何がいけない?……)

『アカデミズム』 歴史学界と社会の間に分厚い壁。 いまも残る強い違和感

問題点1 歴史学と文学 古くは遠山茂樹他『昭和史』をめぐる論争なんてものがありましたか……

歴史研究・論文に虚構フィクションがあつてはならない。この命題は正しい。

私的反論

文学は虚構の小説だけではない。たとえば中国では一三世紀にいたるまで、虚構ノベルは登場しない。短編虚構小説はあるが、ノベルといたら長篇小説を指す。歴史文学は伝記が主流である。西洋においても虚構文学が主流になるのは一九世紀以降である、中国や西洋では、歴史叙述は文学にふくまれる。

たとえば、『明治文学全集』（筑摩書房）全百巻は画期的。小説は三分の一にすぎず、そのほかは明治史論集。福沢諭吉、中江兆民、田口卯吉、内村鑑三などの論説を含む。

虚構の小説を文学とする狭義の定義は、私小説・文壇文学を「純文学」と呼ぶ日本独特。

物語性ストーリーについて。historyとstoryは語源を同じくする。読者の目を意識すれば、あらゆる文章は物語性を帯びる。

歴史学は「文学」ではない、というその「文学」観は非常に狭いもので日本独特のもの。歴史と文学の溝を狭めるには文学概念を拡大しなくてはならない。(文学概念の拡大に関しては、加藤周一『日本文学史序説』参照されたし)

優れた論文は、推理小説に似る。論文は謎解き。歴史学論文も提起した問題を史料で解決する。史料を証拠に置き換えれば、すぐれた歴史学論文は、すぐれた推理小説に近づくだろう。逆もまたしかり(な

にをいつてるかわからん」という人は、とりあえず、ウンベルト・エーコの『薔薇の名前』を読んでみてください。

問題点2 司馬文学批判 何を代表させるか？

歴史学界の司馬史観批判。たとえば……（中村二〇〇九）

英雄史観で、民衆、あるいは、階級が描けていない。

史実と異なる点、実証性にかんする疑義。

明治を「明るい時代」として描いている。

日露戦争を祖国防衛の「国民」戦争とし、一兵士の視点がない……などなど。

「こうした批判はすべて「正しい」。史料に基づく実証主義という歴史学の矜持。

司馬文学の何を代表作とみるか？ 歴史学界では『坂の上の雲』への批判が集中。

成田龍一『戦後思想家としての司馬遼太郎』（筑摩書房、二〇〇九）

司馬晩年の『鞭靱疾風録』、街道をゆくシリーズ『オホーツク街道』を高く評価。

一国史＝国民国家史（ナショナル・ヒストリー）を超える視点

司馬文学を一面的に批判している歴史研究者は、晩年に変化した司馬文学を読んでいない。

問題点3 司馬文学の読まれ方、読書・読者の視点が欠落。

いったい、大衆小説の読者とは何者なのか？

戦後歴史学とはいったい何者なのか？

戦後歴史学の二つの面… マルクス唯物史観を中心とした実証的な研究。歴史の発展法則。戦前の天皇制軍国主義を阻止できなかった反省から、反戦平和と民主主義の実践を目指す運動。すなわち「たまたか歴史学」（私は賛成する）

問題は の側面。

1 「たまたか歴史学」の担い手は大衆である。

2 大衆文学の読者は大衆である。

3 大衆への信頼なくして、運動の担い手として期待することはできない。

はたして、大衆は司馬文学を読むと「司馬史観」に染まるのか？

英雄史観批判への鋭い指摘

個人をクロースアップする司馬史観は英雄崇拜主義であるという一方の側からの批判に対しては、英雄崇拜主義とやらはらのかたちで司馬文学の中にある、お前はいつたい歴史にどう参加しているのかといった個々の主体性への問いかけを抜き出してきて対応させるべきだろう。そうすると、個人ではダメだ、階級だという主張の方にこそ、どこことなく個人一人一人の歴史への主体性を解消してしまう気安さみたいなものがあり、そこからかえって自分の主体性を特定の個人にあずけてしまう個人崇拜主義が発生してきたりする。

（斎藤 一九七四）

司馬文学の英雄は『竜馬がゆく』のように、ただひとり歴史を動かしてしまふ。読者は、竜馬にあこがれる。それは、英雄崇拜を生むが、他方、自分も竜馬のように歴史を動かしてみたいという、歴史的

意欲が引きだされるような読み方がある……

疑問 目覚めた大衆の歴史的意欲は、戦後歴史学がめざしてきた、歴史創造の担い手たる主体性と異なるものなのだろうか。

2 司馬文学・大河と歴史における「日常」の発見

——《太閤記》の視点——

美学者・中井正一の「聖なる一回性」＝歴史的時間は繰り返かえさない。人生もまた。唯一、時間が繰り返かえず芸術 「映画の時間」

ニユース・フィルムについて

フィルムが撮った一画面の中の、群衆の斃れている一人を私たちが見ている時、私が見ている一黒点は、その涯をたどるならば、現象、撮影、すなわち物質的手続きを貫いて、実はじかにその横たわっている一人の人間の肉体に、私の眼は連続しているのである。^{改行}それは歴史的な聖なる一回性に、私は時間を隔てて、再び連続していることを示すのである。(中井 一九七五)

映画による「聖なる一回性」の「時間の再現」に、観客が「個人の時間をダブらせる」

このとき、人間の意識の奥にある願い、歴史感が撃発される。

「この人間生活がはたして正しく導かれるのか? という根源的な嘆息。

映画においてダブる一回性は歴史小説や大河ではどうなってるのか?

司馬文学の人物像…『国盗り物語』『新史太閤記』 豊臣秀吉像

日常性というのは人間の持っている万古不易のものですからね。たとえば秀吉も私たちも、同じようにご飯をたべている。晩年の秀吉は、多くの老人がそうであるように好物は少年のころのたべものでした。とくにおカキは大きすぎたらしいですね。火鉢をひきよせて自分であぶりながら食べたのか、侍女かなにかに焼かせたのか、そこまではわかりませんが、……こういう事柄は、それによって歴史解釈に関係ができてくるわけではありませんが、秀吉という人物が、記録のなから肉质感を帯びてあらわれてくることは確かです。(司馬 二〇〇七)

「日常性」は「万古不易」人間の日常生活には共通性・普遍性がある。そこから過去の人物に親しみを感じ、「肉质感」が生まれる。われも人なり。彼も人なり。

司馬英雄史観の英雄は拝み伏せるような偉人ではなく、日常性＝喜劇性を帯びている。

大河ドラマ作法に共通!

大河ドラマの秀吉像 NHK大河第三作『太閤記』一九六五年(原作・吉川英治)

高度成長期のただなか。東海道新幹線・東京五輪開催にあわせ一九六四年一〇月一日に開通。《太閤記》の放映開始は翌年一月三日。視聴者をアツ!といわせた冒頭のシーン。

テレビドラマ初のヘリコプターによる空中撮影。

開通間もない新幹線が登場! 通例、時代劇・歴史ドラマは現代のモ

ノが映り込むのはタブー!

東京駅から東海道を疾走する新幹線は秀吉ゆかりの名古屋を通り、京都へ。豊国神社、そして、緒形拳扮する豊臣秀吉につなぐ。

いま現在の視聴者の日常を新幹線ひかり号に満載して、過去につなぐ。歴史的時間につなぐ。

「タイム・マシンの方法」とよばれる画期性。

この手法の生みの親・チーフ演出家の吉田直哉。吉田は、今川義元役に三國一朗を起用。

時代劇の人物たつて、のべつ緊張していたわけじゃないでしょう。……

日常生活というものはあつたはずですよ。その「日常性」を歴史上の事件と同格におくわけです。……今川義元ってのはふつう悪役ですよ、

悪役ほど人間味を出そうというので、三國さんをもつてきて、「モラスな味をねらつたのです。(吉田一九六五)

・三國一朗はユーモラスな今川義元の役づくりのために体重を増やして八五キロまで太つたという。

司馬文学と大河ドラマは、「日常性」と人間の「喜劇性」を大衆と歴史との通路にしている。

3 時代考証と歴史学

——《足尾から来た女》から考える——

大河ドラマに欠かせないのは時代考証。東京学芸大学・大石学らを中心に歴史研究者による「時代考証学会」が設立され、各地で講演・イベントを行っている。

史料に基づいた歴史再現性の検証。

政治的な転換や「事件」に比べると、日常生活は空気のようなもので意識されない。あのう、一週間前の夕食に何を食べたか、パツと瞬時に思い出せますか？

日常の史料は実は少ない。

《足尾から来た女》(NHK、二〇一四年) 主役・新田サチ(尾野真千子) 田中正造(柄本明) 時代考証・石居人也「文献による歴史研究では気づかないところに難しさ」歴史の視覚化

難しかった時代考証の例

土に銅廃棄物が混ざると、どんな色になるか。カラー写真がない

時代

鉱毒で汚染された農作物、たとえば芋は、どんな具合か? 画像・映像資料がない。

映像資料がない。

田中正造の演説でつかわれたスローガンや垂れ幕(?)の文言や素料は?

もつとも難しかったのは谷中村の日常。

よく知られている鉱毒事件の谷中村の写真は、じつは政府が強制破壊したあとのもので、それ以前の村の姿、すなわち、民衆の日常を知る史料が乏しい……。

《足尾から来た女》ダイジェストで確認。

4 そもそも日常の史料はなかったのか？

——「雑」の位置をめぐって——

西欧・戦前から民衆の日常、生活文化を研究対象に。

・アナール派たとえばブローデルの金字塔『日常性の構造』

・ミクロヒストリアたとえばカルロ・ギンズブルグ『チーズとじ虫』

・ポスト構造主義たとえばミシェル・フーコー『監獄の誕生』

日本では……戦後歴史学は「人民闘争」を掲げた。（私は賛同する）

「人民」の「闘争」ではない日常性は、ながらく等閑視。

日常へ向けて、文化史・社会史が盛んになるのは、「冷戦」崩壊後。

戦後歴史学・権力対人民、階級闘争に研究が集中。

・百姓一揆研究がど真ん中に。

・支配され忍従する百姓像から、たたかう百姓像を描きだすことに成功。

大きな成果をあげた。

・歴史を動かすのは一握りの英雄ではなく民衆である。（そのとおりだ！）

問題は百姓一揆研究自体ではなく「集中」

なぜ「集中」するのか？ ひとつは戦前の反省という戦後歴史学の

理念と歴史観による。しかし、それだけではない。

民俗学・柳田国男の反撃

近年世に出た日本の農民主なるものを見ると、故意ではない人の著述にも一揆暴動などの事変が多過ぎる。永い年代を回顧すると、成

程災害の記事などは目に付き易い上に、百姓騒動の類は所謂局に当る者の責任を明らかにする為に、無暗に饒舌に書留めて置かうとするのが人情だから、或いはさういふ事件の連続が、即ち農民史であるかのような如き感じを与へるかも知らぬが、個々の地方の実際に当たって見ると、それは甚だ希有であり、又時としては全然さういふ経験を持たぬ場合も多い。（『農民史研究の一部』斯民一九二七）我邦の農民の歴史をただ一揆嗷訴（強訴）と風水虫害等の連続の如くしてしまつたのは、遠慮なく言ふならば記録文書主義の罪である。（『国史と民俗学』一九三五）

戦前から歴史学が民衆の事件・一揆に集中しているぞ、という批判はあつた。

「記録文書主義」だとなぜ、日常が抜け落ちるのか？

史料、殊に近世史料とは何か？ 世界にもまれな、民衆の手による

史料が膨大に残されている。近世民衆の識字率は世界のなかでめきんでて高い。

「兵農分離」による文書支配。行政文書・公文書が圧倒的に多い。

史料の性格を意識しないと民衆の「日常性」が抜け落ちる。

民衆って一体なんだ？

なによりもまず、生活者。民衆は非日常的な革命家ではなく、圧倒的に日常生活に人生を費やす。

闘争か日常か、ではなく、闘争も日常も。両者の関係性が大切。

戦後歴史学が目指した政治活動・運動の持続性（いまでいえば反原

発・護憲運動など）をもたせていくヒントもそこにあるだろう。記録

文書主義の特質を意識して史料をみることで、新たな民衆像が描けるのではないか……ということに、戦後歴史学者が気づかなかつたわけではない。

実は、民衆の日常の史料はある！

青木美智男…百姓一揆研究の旗手。ということは戦後歴史学のご真ん中にいた。

青木の主張…戦後歴史学の史料分類は、敗戦直後の研究水準と問題意識、つまり「民主化」という課題意識が反映している。史料分類項目はその問題関心に従い「土地」「経営」「触書」など政治経済に集中し、重視された。その結果、民衆の日常に関する史料は重視されず、「雑」という項目に一括して分類され、顧みられることがなかった（青木一九七六）。分類は仮のものであったが、踏襲されているうちに定着し、絶対視されるようになった。自治体史など。「この点、『愛知県

史』の近世史はユニークである。なぜなら、近世部会長は青木美智男。「雑」には何が入っているか…俗謡の書き写し、手習い本、雑俳、句集、歌集、瓦版、生け花、囲碁将棋などの本……日常や娯楽の史料。

過去の遺産である史料はすべて平等の価値をもつ。「雑」という分類は、戦後歴史学の研究視角からのもので、本来は存在しない。青木は一揆研究と同時に、「雑」にもとづく生活文化を追求し、化政期を中心とする庶民文化論を確立する。『日本の歴史別巻 近世庶民文化 日本文化の原型』

歴史学の現状…戦後歴史学 現代歴史学。社会史・文化史が盛んに。

「日常」も「民衆」も「庶民」も研究対象。

「日常」が歴史になる！

北名古屋市歴史民俗資料館 改名……

昭和日常博物館！ 来年は改元。昭和は遠くなりにはけり……。

そして、われらが寅さん「男はつらいよ！」が……。

まとめ

大河ドラマ・歴史小説・歴史学を結びつける「日常性」とは？

戸坂潤「日常性の原理と歴史的時間」

・時間とは？「時間であるためには必ず何かの刻みを持たなければならぬ」

・時代とは「刻みを、休止点を、入れられた時間、Periodeを意味する」「歴史的時間はそれ自身の内容によって時代にまで刻まれる」

・「時代は何によって性格づけられるか。政治によってである」

戦後歴史学が追究した時代の性格、階級闘争、歴史の発展法則。では、日常は？

・「歴史的時間が人々の問題となる動機は、正当には、人々がこの歴史的時間の中で生活しているという事実の外にない。之は吾々の生活の時間である」

日々の持つ原理、その日その日が持つ原理、毎日同じことを繰り返しながら併し毎日が別々の日である原理、平凡茶飯事でありながら

絶対に不可避な（＝中井：聖なる一回性）毎日の生活の原理。そういうものに歴史的時間の結晶の核が、歴史の秘密が、やどっている。歴史は過去の出来事であると同時に、現にいま日々つくられているものでもある。

・歴史を眺める人々にとっては、「現在は現代位で沢山だろう……彼等に取っては何も今日でなくてはならない程押しつまってはいないから」「私の生涯が無限ならば仕事は明日に明日にと延ばしてさしつかがない……それが、死が何時かは来るものだから、仕事は一定の時間の内に片づけられなくてはならなくなる（＝中井：聖なる一回性）」「実践的生活人＝大衆にとって「歴史的時間とは」「日常性の原理」に支配される」

・「何を前にし何を後にするかという……平凡な日々の持っている原理が日常性なのである」

結論（らしきもの）…歴史小説と社会、大河ドラマと社会、歴史学と社会にとって「日常性」は重要なのである。それは、いまを生きるわれわれにとって、「日常性」とは、歴史的時間をリアルに感じる通路となっているからである！了

参考文献

- 青木美智男 一九七六「日本近世史研究と古文書」『歴史科学への道』校倉書房
- 石居人也 二〇一五「時代考証学会第五回サロン」報告（二月二日帝京大学霞ヶ関キャンパス）
- 小川和也 二〇〇六『鞍馬天狗とは何者か』藤原書店

- 同 二〇一四『儒学殺人事件』講談社
- 齊藤駿 一九七四「司馬遼太郎の世界」『思想の科学』一二月号
- 司馬遼太郎 二〇〇七『手掘り日本史』文藝春秋社
- 戸坂潤 一九六六「日常性の原理と歴史的時間」『戸坂潤全集』第三巻
- 中井正一 一九七七『美学入門』朝日新聞社
- 中村政則 二〇〇九『坂の上の雲』と司馬史観』岩波書店
- 吉田直哉 一九六五「ばらえてい」『週刊朝日』三月一二月号